

幸せな 働き方って どんなカタチ

WORK STYLE REFORM

LIST OF COMPANIES



働き方改革や

働きやすい職場環境づくりに

積極的に取り組んでいる企業紹介

14社

ダイバーシティ推進実行委員会おかやま

仕事や家庭で
頑張っている親へ
今だから言える
ありがとう。

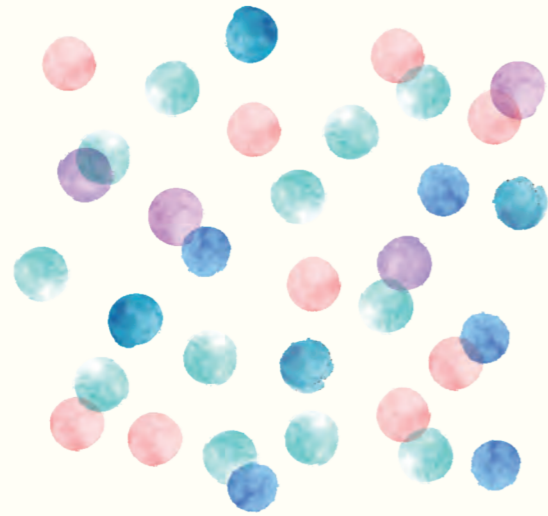
～子から親へのエール2018～

普段はなかなか伝えることができない
親への感謝の気持ちを伝える論文コンクール

受賞作品集

ダイバーシティ推進実行委員会おかやま

2019年1月23日発行



分か
つて
くれる
だけ
で
いい。
。

エール論文が始まったころと比べると、「ダイバーシティ」という言葉はだいぶ一般的になってきたように思います。それは私たちが目指していることでもあります。それが最終目的ではありません。私たちは何を指して、ダイバーシティに向けた活動をしているのでしょうか。

エール論文は、今年度過去最多の応募があり、心を震わせる作品が数多く集まりました。その中で、西日本豪雨災害で被害にあったにもかかわらず、家族が心配する中、勤務先の病院で被災者のケアをするお父さんの姿を描いた作品がありました。また、ひとり親家庭で生活が苦しいにもかかわらず、そのつらさを表に出さずに育ててくれたお母さんの姿を描く作品もありました。それらの作品の共通点は、社会と家庭のはざまに生まれる葛藤を子どもが振り返り、理解し、メッセージにしている点だと思えます。親の、大切な家族と自分の幸せを守りたいという気持ちと、社会のため勤務先のために頑張ろうという気持ちは、限られた時間（人生）の中では、本質的に整理しきれない、相いれないものだと思います。ダイバーシティを大切にする流れが広がっていったとしても、そのような葛藤に直面する人はいなくなると考えるべきかもしれません。

それを前提とした時、私たちができることは何でしょうか。「ダイバーシティが大切！」と声高に訴えても、厳しい現実を受け入れざるを得ない人はなくなりませんし、逆にそれが虚ろに聞こえ、埋められないギャップをさらに実感する人も生まれてくるかもしれません。そういった状況をなくすための新しいアイデアはもちろん皆で知恵を絞って生み出していかなければなりません。

しかし、どうにもならない状況にある人は間違いなく存在するわけです。その人たちこそ支えが必要なのかもしれません。その時、私はこのエール論文の意義が際立ってくるように思います。

私ごとですが、ビッグデータを活用した支援の社会実装が広がりはじめ、休日や真夜中に大学に出でいかなければならないことが多々あります。正直辛いと思うことが多いですが、子どもや妻が、「きのうは何時に帰ってきたの？」と聞いてくれるだけで、その辛さがスッと消えていく経験を何度もしています。知ってくれているんだと思えるだけで、ネガティブな気持ちが消えていってくれます。

私の例はささいなことですが、個人的な辛い事情を人に語ることはなかなかできません。しかし、それを自分が大切にしてきた家族が理解してくれていると知ることだけで、人は救われ、前を向いて進んでいけるようになるように思います。エール論文は、そのような家族の存在を、読む人に確信させてくれる作品だと思います。日々の生活の中、自分に鞭を打って頑張っている人を、家族や周囲の人が理解してくれている、もしくは理解してくれる日が来ることを、エール論文ははっきり伝えてくれます。

今年度の作品の中に、こんな話は結婚式ぐらいしか口にしないだろうと思いつつ、恥ずかしいけれど親に対して「ありがとう」と伝えたいと記している作品がありました。高校生や大学生に限らず、私たち大人も、恥ずかしがらずに、大切な人に「ありがとう」と伝えてみてはどうでしょうか。

ダイバーシティ推進実行委員会おかやま
会長 寺澤 孝文
(岡山大学大学院教育学研究科 教授)

論文コンクールについて

「仕事や家庭で頑張っている親へ今だから言えるありがとう。～子から親へのエール論文～」と題して、仕事や家庭で頑張っている親に対して、泣いたり、笑ったりしたエピソードや親へのエールとなるメッセージを添えて、働き方の多様性を主に家庭の視点から考えることを目的に、高校生・大学生等から論文を募集いたしました(2018年7月～10月募集)。

応募があった高校・大学等

岡山県立大学、岡山大学、山陽学園大学、就実大学、中国学園大学、岡山県立岡山芳泉高等学校、岡山県立西大寺高等学校、岡山県立城東高等学校、岡山市立岡山後楽館高等学校、岡山白陵高等学校、就実高等学校、津山工業高等専門学校

選考は、岡山県内の大学関係者による審査会にて行いました。今年度は、昨年度に引き続き、岡山県知事賞、岡山経済同友会代表幹事賞、岡山大学長賞、入選、本コンクールを通じて多様性の教育推進に取り組んだ学校へ贈る

ダイバーシティ教育推進学校賞を選考いたしました。各賞の表彰は岡山県庁3階特別応接室にて表彰式(2019年1月18日開催)を行いました。

審査委員一覧(50音順)

岡山大学大学院教育学研究科
教授 片山 美香

岡山県立大学保健福祉学部保健福祉学科
教授 佐藤 和順(審査委員長)

山陽学園大学総合人間学部言語文化学科
教授 佐藤 雅代

岡山大学大学院教育学研究科
教授 寺澤 孝文

岡山大学大学院環境生命科学研究科
准教授 樋口 輝久

「ダイバーシティ推進実行委員会おかやま」について

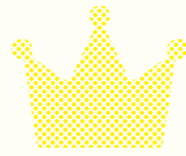
当実行委員会は、大学生等のキャリア教育や情報発信、調査研究を通じて、家庭と企業双方の視点から男女共同参画の推進や働きやすい環境づくりなどダイバーシティの推進を行うことを目的として、岡山大学、一般社団法人岡山経済同友会、岡山県で構成された組織です。ダイバーシティに関するシンポジウムや論文コンクールを実施しています。

実行委員会構成団体

国立大学法人岡山大学
一般社団法人岡山経済同友会
岡山県

事務局

株式会社ロゴデザイン



大学生部門
岡山県知事賞

家庭の価値観

山陽学園大学 3年 山田 奈々

私の母は、当初はパートタイムだった販売員の仕事に、現在は正社員として勤務している。母が正社員になったのと同じ頃、私達姉妹が高校生になった。そのため、以前のように規則的な帰宅時間とはいなくなり、家族4人で過ごす時間は劇的に減った。元々、父が朝出社し、夕方に退社するとはいかない勤務体系なのも影響していたと思う。そのせいか、たまに家族全員で過ごす休日は、奇妙なほどくすぐったく思えた。それは、物を言わぬ愛犬でさえも、そう思っていたのではないかと、より軽快な仕草から察せられた。

母は、仕事に加え、独身の頃から嗜んでいた茶道にも精力的に取り組んでいる。それも、趣味の範疇を飛び越え、普及、あるいは慈善活動として、京都や福島県いわき市、そして遠方ではバルセロナにまで活動の範囲を広げている。私は幼い頃から茶道をしている母を間近で見てきたし、一緒に活動させてもらうことも多かったため、母の影響で価値観が陶冶されていった。現在大学で古典文学を専攻しているのも、その影響が少しなりともあるとはいえるのではないだろうか。

しかし、母方の祖父母は昔気質な性格で、母が家庭を空けることに関してかなり善く思っていないようだった。そして、父や私達を心配し、申し訳なく思っているような態度をみせて、「淋しくないか」と問うてきた。それに対して、私は虚勢でもなんでもなく、本心から「淋しくない」と答えていたし、妹も私と答えを同じくしていた。妹も私と同じで、幼いながらに、母として以上に、自分が好きなものに心血を注ぐ一人のひととしての魅力を感じていたからなのだろう。

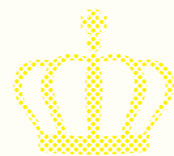
その母を支えているのは、紛れもなく父だといえる。父は、母が度々家を空ける事に関して、不満を抱いているのかもしれないが、決して口外することはない。むしろ、母を応援するように、家事や私達の食事の世話を買って出してくれる。そして、近場だと仕事の合間に母の送迎をしたり、茶会の設営を手伝っていたりすることもある。その両親を見て育ってきたためか、趣味への価値観の相違が離婚の原因になり得る夫婦が多くいる事にとっても驚かされた。

その時、母が2日程家を空けると告げた際に、父が快く返事をし、往復の交通手段の心配をしていたことを思い出した。私にとってはありふれた風景だが、良い意味で普通ではないことを悟り、少し誇らしく思えた。

とはいえ、母は家庭を完全に放棄しているわけではない。私達が好き嫌いをしないで育ててくれたのは母の温かい手料理のお陰だし、一緒にオープンキャンパスなどに赴いて、進路に関して考えてくれた。私達がしたいと言ったことも、出来る限り叶えてくれた。それらの母親の役目に加え、仕事や茶道に貢献しているのだから、そのタフさには感服せざるを得ない。そして父も、母に圧倒されることなく、マラソンやトライアスロンという、自分が心から打ち込める趣味を見つけ、自分らしさを追求しているように思う。

1999年に施行された男女共同参画社会基本法の第六条では、男女の協力のもと、家庭の一員としての役割を果たしつつ、その他の活動ができるようにすることが規定されている。すべての家庭が、私の父と母のように、許容しあっていくことは難しいと思う。その時、男女の役割や、祖父母が抱いていたように、「こうあるべき」という固定観念に囚われることなく、価値観を新たに構築できるか、という点が要になってこよう。

私は、父と母から、唯の両親としてではなく、「親としての使命を全うしつつ、より自分らしい生き方を模索する」母親の姿と、「性別による固定観念をもたず、自分らしく妻を支えていく」父親の姿を普通のように思っていた。しかし、今となっては、それは誇るべきことであり、親としてだけではなく、人間として尊敬できるこの両親の下で生まれ、育ってきたことが、それだけでありがたく思えるようになったし、私もこうなっていきたいという指針にもなった。



高校生部門
岡山県知事賞

私の家族

岡山市立岡山後楽館高等学校 1年 今門 夢瞳

幼い頃から、働く父や母の姿を見て、この光景が当たり前だと思っていた。昔の日本では「夫は外で働き、妻は家庭を守る」という考え方が主流だったことも最近まで知らなかった。私の母は、毎朝四人の子供を学校へと送り出してから職場に向かう。家に帰ってくるのは、私が学校から帰宅するよりずっと後だ。すぐに夕飯の準備を進めて、掃除、洗濯、次々と家事をこなしていく母を見ていると、働きすぎではないか。と心配する日もあった。「少しは休んでね。」そう声をかけたことも何度かあるが、母は決まって優しく微笑んでいた。

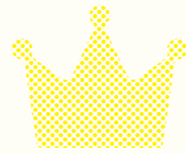
私が小学校四年生の時、弟が体調を崩し、入退院を繰り返した。幼い弟につきっきりだった母は、家にいることがほとんどなくなった。そんな中、忙しい仕事の合間を縫って、料理、洗濯、掃除と、以前までの母の役割だった家事を夜遅くまでしてくれていたのが父だ。その姿を見て、少しでも負担を減らしたいと思い、不器用ながら率先して家事を手伝ったことは今でも覚えている。それまで家事をほとんどしてこなかった私は、掃除機をかけることさえ儘ならなかったが、母は仕事と家庭を両立させ、家事を怠ったことはない。今まで、母が家事をすることが当たり前だった私にとって、この経験は大きな意味があったに違いないだろう。

男女共同参画社会基本法を実現するために「男性も女性もひとりの人間として能力を発揮できる機会を確保する必要がある」「男女が対等な家族の構成員として互いに協力し、社会の支援も受け、家族としての役割を果たす」などが挙げられている。現代社会において、女性に代わって家事をする男性はたくさんいるし、結婚前とかわらず仕事に熱心な女性もたくさんいる。もちろん、家庭によって在り方は様々だ。ただ、私のように、一つのきっかけから、父や母、兄弟や子供、お互いの存在がかけがえない宝物だと気づく家族が増えてほしいと願う。

私が中学校一年生になった頃、姉と弟に障がいがあることを初めて知らされた。それがどういう意味であるか、幼いながらに理解していた私だが、特に気にすることもなく「そうなんだ。」程度で片付けていた。障がいの有無に関わらず、大切な姉と弟だ。その事実が変わりはない。むしろ気にする方がおかしいとさえ思っていた。しかしある日、偶然姉と弟の障がいに関するたくさんの資料を見つけてしまった。いずれも、私が理解するには難しい文章で綴られていたが、父や母はこの事実と常に向き合っているのだと、実感した瞬間だった。その日から、母の抱えているものが、一層大きく感じた。そんな素振りを一切見せず、常に明るく、普段と変わらない笑顔で私たち兄弟のことを一番に考えてくれる母を、心の底から誇りに思う。

私の将来の夢は、障がいを持った子供たちと関わる、療育施設の保育士になることだ。その夢を目指すきっかけとなったのは、大好きな兄弟の存在や、いつも支えてくれる両親の姿である。この夢を家族に話したことは一度もない。きっと、今の私には無理だと笑われるだろう。いつか母のような、何事にも妥協しない、真っ直ぐに生きる力を身に付けた時、自信を持って話したい。時にはぶつかりあって、「どうして私はこの家に生まれてきたのか」と落ち込んでしまう。しかし、必ず思い起こされるのは、家族六人、みんなが笑って、一つの時間を共有している場面だ。この家に生まれてこなかったら経験できないこともたくさんあっただろうし、この夢を持つこともなかったのだろう。私の人生の中で一番輝いているのは、他の誰とでもない、家族という時間だ。これだけは譲れない。私の両親は毎日、たくさんの仕事をこなし、たくさんの愛情を注いでくれる。そんな両親が私の永遠の憧れだ。普段は恥ずかしくて言えないけれど、

「パパ、ママ、いつもありがとう。」



大学生部門

岡山経済同友会代表幹事賞

共働きを支える秘訣

岡山大学5年 佐々並 三紗

近年、共働きの家庭が増えている。しかし、女性が社会に出やすくなった分、子育てに関する問題は避けられない。共働きの家庭ではどのように子供を育てるのか？子供達は寂しい思いをしないだろうか？愛情は不足しないだろうか？

私の母はまさにそういった問題を経験した子供だったらしい。祖父は公務員、祖母は服の直しを生業としており、母の家庭はその時代には珍しく共働きの家庭だった。祖母は家で作業していたものの、仕事に忙しく子供達のことはほったらかしで母はとても寂しい思いをしたそう。一度などは、忙しさに追われる祖母が母の楽しみにしていた子供会のイベントの日を間違え、参加できずに泣きながら家に帰ったこともあるそう。そのような思い出や父の希望もあり、母は私が生まれた時、正社員を辞めて専業主婦になることを選んだ。私と弟はのびのびと育てられたが、やがて、私が小学校に上がってしばらくして母は再びパートという形で元の職についた。

そうして私も先に掲げた問題の当事者となった。しかし、私の場合は、父は忙しく働いていたものの母は朝や夕方は家におり、寂しさといったものは全く感じなかった。また、中学校に入ってから2世帯で暮らすようになり、ますます寂しさとは無縁になった。私は、共働きを大変と思ったことは一度もなかったし、寂しさや愛情不足を感じたことも一度もなかった。もはや祖母が忙しすぎて母が寂しさを感じていたなど信じられないくらいだった。一度、仕事に忙しい母は私が林間学校から戻る日を間違え、いつまでたっても迎えに来てくれないことがあった。どこかで聞いたような話だな…と思いつつ、心配してくれた先生に親と連絡が取れたことを告げると「お母さんもあなたに似ているんですねえ」と言われ、忙しさより血筋を恨んだものである。

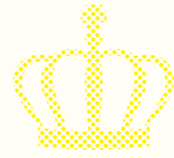
共働きで、出産・子育てと仕事を両立するのが難しいことなのだと本当に理解するようになったのは実は最近だ。私は大学5年生になり、ようやく実習という形で

目指している医師の職場を目の当たりにした。責任のある仕事に忙しく働く医師たち…。今までも医師の仕事は大変だと聞いていたものの、やはり普通の勤務形態で出産・子育てが不可能なことは一目瞭然だった。しかし、そのような場にもサポートが無いわけではなかった。敷地内に幼稚園があったり、急に発熱した病気でない子供を預かる場所があったり。しかし、それで問題が全て解決するわけではないだろう。私は医師として働き続けたいし、子供を持つとしたら共働きの可能性が高い。将来を考え我が身を案じた時、母のことを思いだした。

「お母さんはね、ほんとに正社員として働き続けたかったんよ。正社員として働いてたら今頃・・・」

母の口癖だ。働きたい気持ちを振りきって私達子供のために正社員を辞めた母。パートを始めても、ご飯を作り、朝は私達を見送り、夜は習い事の送り迎えをしてくれた母。始めは派遣社員のパートから始まった中で、それがどれほど大変だったことか。しかしよく考えると、生活は母のおかげだけで成り立っているわけではなかった。祖母は母の忙しい時などは喜んで料理を作ってくれた。「お母さんは仕事で大変だから、手伝ってあげんとね」と、仕事で忙しかった祖母が今度は仕事で忙しい母を助けていた。祖父も父もよく送り迎えをしてくれたし、家事にも協力的だった。みんなそれぞれ仕事がある中で、私の夢を応援し協力してくれる家族。なるほど寂しさも感じないはず。社会の厳しさを知った今、感謝の気持ちでいっぱい。

人は皆忙しい時期が違う。それは一日の中でも、一週間の中でも、月単位、年単位でも同じこと。家庭内で助け合えたら一番いいのだろうが、核家族化が進む中、今はそれも難しいことなのかもしれない。皆がそれぞれの場所で活躍するために、それぞれが助け合い、今後ますます出産・子育てに理解ある社会になることを願っている。



高校生部門

岡山経済同友会代表幹事賞

私の宝物

岡山県立岡山城東高等学校 1年 海田 千尋

私の家庭は、他の家庭と違うのだと、日常生活でも感じることがよくある。それはきっと、私の家庭が私と姉と父の、いわゆる父子家庭と呼ばれる家族の形だからだろう。片親が珍しくない現代でも、父子家庭、しかも子が娘だと少数派だ。この家族構成となったきっかけは、私が小学校3年生のときに母が亡くなったことだ。

母は、私が幼稚園へ入園する頃には、既に闘病生活を送っていた。しかし、私たち子供に辛そうな素振りを見せることはなく、いつも朝早くから晩遅くまで家事を立派にこなしてくれていた。お遊戯会や発表会、行事があれば、いつもカメラを片手に見に来てくれ、沢山の思い出を丁寧にアルバムに詰めてくれた。入退院を繰り返すようになってからも、退院許可をとってまで、誕生日を祝って、一緒に過ごしてくれた。いつも叱られてばかりだったが、テストで100点をとったとき、ピアノを頑張ったとき、些細なことでも母は褒めてくれた。私は、そんな母が大好きだった。病気は治る、そう信じて疑わなかった私のもとに、その日は突然訪れた。

12月上旬、駆けつけたときには手遅れで、私は母の最期に間に合わなかった。手は既に冷たくなっていたことと、祖母の涙を初めて見たことだけは、よく覚えている。なぜ、母が死ななければならなかったのだろう。なぜ、もっと感謝を伝えていなかったのだろう。後悔と悲しみで、涙が止まらなかった。「お前たちがいたから、ママは頑張って病気と闘ったんだ。5年も頑張れた」そんな言葉を父からかけられ、母親という存在の偉大さと強さを痛感した。

母の死後、私たちの生活は一変した。なんとか日常を取り戻してからも、母は専業主婦だったから、やはり家事には困った。母方も父方も、祖父母どころか親戚はみな県外で、家事の助けを求めるのは難しかった。今でこそ、家事全般を受け持つようになったものの、それぞれ小学生のときは、洗濯、料理、買い物、家事という家事は、ほとんど父が担当していた。加えて子供会にも選出

された年には、更に忙しくなった。もちろん仕事は今まで通りで、職業上、休日出勤も少なくない。申し訳ない、と思ったのは家族で家事を分担し始めた中学生の頃だっただろうか、しかし申し訳ないの一言で済ませべきではないことだと気づいたのはつい最近だ。

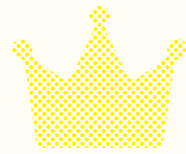
共働き家庭が増えてきている中、未だ女性だけが家事を受け持つ家庭は少なくないだろう。世の中にそのような風潮が残っていることも否定できない。そう、父が行っていたことはつまり、女性の立場なら当たり前と思われがちなことなのだ。家事労働は当たり前だが無償なので、それを当たり前のように受け取ってしまいがちだが、家事をしたらそれがいかに不当な扱いか、よく分かる。一日の自由な時間を割いて、仕事ではなくとも働いている、ということに気づいてほしい。

「男女共同参画社会基本法」というのは男女平等の推進を図るもので、男女共同参画社会、すなわち男性も女性も、意欲に応じて、あらゆる分野で活躍できる社会、の実現を目指している。もし、女性が家事を受け持つのが当たり前ならば、これが叶うだろうか。私には、とてもそうは思えない。家事が仕事の障害になり、働きたくても働けない、今の日本はそんな世の中ではないか。

これを変えるには一人一人が意識を変えることが大切だと思う。今までの常識という名の偏見に縛られない。男女関係なく、互いを認める。対等な立場で繋がる。寄りかかるのではなく、支え合う。活躍できる場を妨害するのではなく、協力する。自分の役割を見つけ、それを果たす。今の当事者だけではない。次の世代、これからの日本を担っていく私たちが、行動しなければならない。

最後に、私をここまで育ててくれた両親に感謝をしたい。

お母さん、お父さん、本当にありがとう。2人のもとに生まれてきた私は、世界一の幸せ者だと思います。家族は、私の宝物です。



大学生部門
岡山大学長賞

おくりもの

岡山大学 2年 藤本 梨沙子

「コツコツの積み重ねが大事。」これは母がよく口にしていた言葉です。今年の夏に母が亡くなり、私は喪失感から立ち直ることが出来ませんでした。亡くなってからは毎晩、母のことを思い出しては涙が止まらなくなり、なかなか寝付けない日々が続いていました。時間が経ってようやく落ち着きを取り戻しつつある今、心の中にいる母を想いながら生活しています。

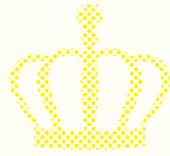
私の母は、優しく、思いやりに溢れた人でした。また、たわいもない話で笑わせてくれて、私の日々の疲れを癒してくれる存在でした。そんな母は、約2年前に、膵臓に異変が見つかり、それからは入退院を繰り返していました。しかし、今年に入ってから病状が悪化し、入院期間が長くなり、外出も難しい状況になってしまいました。父は、ほとんど毎日のように面会に通って母の看病をし、私も大学の授業の空き時間に母に会いに行きました。身体の調子が良い時も悪い時も会いに行くと、母はいつも私の近況を聞いてくれたり、病気が治たらやりたいことや行きたいところについて話したりしていました。母が最後に外出できたのは、私の成人式の前撮りをした日でした。その日は、主治医の先生から外出許可が降りたため、1日だけでしたが、母は車椅子で来てくれました。その時撮った母との写真は大切な宝物です。母と出かけた最後の思い出だったので、あの日は本当に奇跡だと思いました。

母と過ごした日々を振り返る中で、母が私によく言っていた言葉があります。それが「コツコツの積み重ねが大事。」という言葉です。この言葉には、何か夢や目標を達成するためには日々の積み重ねを大切にしろ、というメッセージが込められています。私が受験生だった時期も、この言葉を信じて自分がやるべきことを丁寧にコツコツ積み重ねて、準備したからこそ合格をつかむことができたのだと痛感しています。母は入院中、精神的にも肉体的にも衰えていく中、自分でできるこ

とを増やそうと頑張っていました。辛い時やしんどい時も絶対良くなると信じ続けていました。前向きな姿勢を変わず保ち続けた母は本当に辛抱強い人だなと思います。そんな母がいたから、私は私らしく強く生きていこうと思えるのです。母に代わる人はいません。私は母から送られた言葉が、自分にとってモットーであり、支えになっています。

父は、仕事を一度定年退職をしていましたが、母が病気で仕事を辞めてしまったため、もう一度仕事に復帰して働いています。母が入院するようになってからは、慣れない家事にも取り組み、仕事と家庭の両立を凶っていました。それに加えて、母のところに毎日通っていたため、心身ともに疲労がたまってもおかしくないはずなのですが、父は趣味であったり、友達と会話したりして、自分の時間を設けてストレスを軽減させていました。父は母の分まで元気に生きようと必死だったのだと思います。母が亡くなってからも、一家の大黒柱として全力を尽くし家族を支える父の姿を見て私は感心しました。私も父のようにたくましく生きていきたいです。

私は父と母からたくさんの愛情を受けてきたと感じています。母が書いていた日記には、自分のこと以外に子どもの成長を応援する内容が書かれてありました。私はその日記を読み返すたびに、涙が溢れてきます。母の存在が私の中でどれほど大きなものだったか、亡くなってからより強く感じるようになりました。母からのからのおくりものは言葉だけでなく、相手を思いやる心を持つことだと考えます。実際に、一度どん底に落ちた私を救ってくれたのは、周りにいる大切な人々の存在でした。親身になって支えてくれる人がそばにいてくれるのは、とても有難いことです。その人たちへの思いやりの気持ちを忘れず、今まで関わってきたすべての人に感謝してこれからも前進していきたいです。



高校生部門
岡山大学長賞

母の偉大さ

岡山県立岡山芳泉高等学校 2年 三宅 緩奈

私が高校二年生の時の六月に、母が入院することになった。幸いにも重い病気ではなく、一週間程度で退院できるとのことだった。

母が入院している間の家事の分担を決める時、私は「料理をするよ。買物も行く。」と父と妹に言った。父は朝早くから夜遅くまで働いていて、とてもじゃないけど家事を出来る生活ではない。中学生の妹は部活をしていて、帰ったら疲れきっているようで、寝ていることも多い。自分しかできる人はいないという責任感から、料理を担当しようと決意した。

毎日の朝食と夕食作り、自分の昼食用の弁当の用意。土日は妹の弁当も作らなくてはならない。献立をたて、材料を買いに行く。思ったよりもやる事が多くて、少し不安になったが、母のことを「大変そうだな」と思ったことは無かったし、自分も上手くこなせるだろうと、根拠のない自信をもっていた。

初日、皆が好きな野菜の肉巻きをつくることにした。部活が終わり、その帰りにスーパーへ寄った。重たいリュックを背負ったまま、見慣れない精肉コーナーを覗いた。豚肉の薄切りのものを手に取るが、何枚あれば足りるのかわからない。味付けは何ですれば良いのだろう。何もかもわからなくて、インターネットで調べながら買い物をしたため、三十分以上かかった。サラダ油を持って帰るのが辛かった。

結局、夕食にありつけた時刻は九時を過ぎていて、料理に一時間以上かかってしまった。おまけに味は薄くて、肉から野菜がはみ出していた。ご飯もべちゃべちゃで、炊飯器すら上手く使えない自分にショックを受けた。

翌朝五時に起きた。初めての弁当作りだ。妹や父は眠っている中、なんで自分はこんなに頑張らなくてはいけないのか、と急に悲しくなってきた。泣きながら弁当に薄味の肉巻きを詰めた。どう見ても美味しそうではないし、いつもより二時間も早く起きたのに結局ギリギリになってしまった。授業も眠かった。

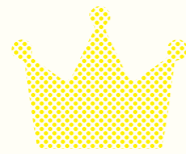
その日の夜、夕食を作っている時に、妹に洗濯物を取り込むように頼んだ。妹は「嫌だよ。部活で疲れたもん。」とスマホをいじってソファでくつろいでいる。普段なら洗濯物くらい私に取り込むし、母が妹に手伝うように言ってくれるが、睡眠時間が短いストレスもあり、妹に怒鳴ってしまった。「こっちは朝も早いんだから手伝ってよ。バカ。」言いすぎた。妹はふてて部屋にこもってしまった。

どんなに辛くても、忙しくても、家族のご飯を作らないわけにはいかず、一週間耐えた。毎日父も妹も「美味しい」と言ってくれたが、自分の料理に対して抱いていた自信は、もう全くなかった。母が帰ってきて、久々に母の料理を食べた時、泣いてしまいそうになった。

母はいつも、仕事をしながら、料理という手間と時間のかかる大変なことをしていることに、改めて気づかされた。しかも、掃除や洗濯は妹と父がやってくれたが、いつもは母はそれも一人でしている。それに加えて、私のほんの些細な話や、部活や勉強の相談も、一緒に笑ったり悩んだりしながら聞いてくれる。妹もいるから、二倍だ。

私は今までの行いを後悔した。自分の仕事である洗濯物を畳むことだけをして、十分にお手伝いをしている気になっていたからだ。それに、母の仕事の話も、適当に流してしまって、ちゃんと聞いたことはなかった。母の入院中、話を聞いてほしいと思うことがたくさんあった。手伝ってほしいと思う時間もたくさんあった。母だっていつも思っているはずだ。それでも、学校がある私には頼まずに、いつも自分で全部している。私はそんな母の大変さにもっと早く気づくべきだったのだ。

これからは「何か手伝おうか？」と、母に積極的に言いたいと思う。そして、手伝いをしながら母の仕事の話を聞き、母ともっと仲良くなって、母が快適に家事を出来る家を作っていきたい。



入 選

大学生部門

山陽学園大学 3年
安原 涼奈

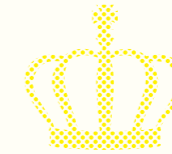
山陽学園大学 2年
朱 燕萍

高校生部門

岡山県立岡山芳泉高等学校 1年
塚本 咲月

岡山県立岡山芳泉高等学校 1年
久山 華穂

岡山県立西大寺高等学校 2年
荻野 栞緒



ダイバーシティ教育推進学校賞

岡山県立岡山芳泉高等学校

岡山県立西大寺高等学校

岡山市立岡山後楽館高等学校

岡山白陵高等学校

就実高等学校

津山工業高等専門学校

(50音順)

● 取り組み内容

- ① 妊娠した社員が妊娠判明後、どの時点からでも休業できる「出産準備休業制度」を創設。
- ② 子どもとのふれあいと家族団らんも促進できる「週1回のノー残業デー」「リフレッシュ休暇」「アニバーサリー休暇」「ブリッジ休暇」を導入。
- ③ 介護や育児を両立させる働き方を支援するため、在宅勤務制度、フレックスタイム制度を導入。
- ④ 出産等で退職される方で両備グループ内各社への再就職を希望する社員を対象とした「再就職登録制度」を導入。
- ⑤ ワークライフバランスの重要性の理解促進、社員間でお互いに助け合う風土の醸成を目的とした「イクボス研修」等を実施。

● 事業内容

行政・医療・健康福祉分野に専門特化した独自ブランドシステムを自社開発し全国展開しています。ソフトウェア開発、コンサルティング、IDC運営、IoT・AI研究開発などに取り組んでいます。

URL www.ryobi.co.jp



上：ファミリーデーでママと一緒にお仕事プチ体験
下：両備システムズ岡山本社社屋

● 取り組み内容

ダイバーシティ推進室を中心に、全社一丸となって働きやすさ改革に取り組んでいます。
取組の3本柱は「採用」「人財育成」「制度改革」です。採用では、年間採用数の4割以上を女性とする、という数値目標を掲げて取り組んでいます。
人財育成では、女性リーダー育成研修や全管理職対象のダイバーシティマネジメント研修などを実施しています。
制度改革では、キャリア継続を支援する「時差出勤制度」「昇格要件特別措置」や、仕事と育児の両立を支援する「特別有休制度」などを充実させています。
これらの取組が着実に風土として根付き、女性社員の産休・育休取得率は100%、さらに、女性社員の約4割が係長以上の役職をもって活躍しています。

● 事業内容

国内シェアNo.1！売上高世界第3位の消防車メーカー。
創業から112年、「人と地球のいのちを守る」という理念の下、社会貢献度の高い事業を展開しています。海外販売実績も100カ国以上、世界の安全と環境を守っています。

URL www.morita119.com



上：女性リーダー育成研修の様子
下：ご家族職場見学会の様子

● 取り組み内容

事業内容(保育・障害者支援)の特性から、女性が多い職場であり、女性の活躍が、事業推進の大きな原動力となっています。この様な現状の中、男性、女性に関係なく、「長く安心して働き活躍できる職場環境」を整備していくことは、仕事と子育ての両立だけでなく、人材確保・人材定着の面からも重要であると考え、以下のことに取り組んできました。

<具体的な取り組み>

- ① 適正な労働時間の管理と事務処理の見直し、簡素化
- ② 一人当たりの年次有給休暇取得率50%達成
(2017年度取得率：62.0%)
- ③ 男性職員の育児休業取得促進(取得実績2名)
- ④ 育児短時間勤務制度の対象を小学校就学前までに拡大

● 事業内容

浅口市内に保育所2カ所、障害者支援施設1ヶ所の計3事業所があり、関連事業としてグループホーム、相談支援事業を実施。「必要な支援を、必要な人に、必要な時にさりげなく提供する」をモットーとしています。

URL www.meikoukai1970.com



上：女性管理職・リーダーも多く在籍！女性が活躍中！
下：次世代リーダー育成研修の様子

● 取り組み内容

2014年より専門組織を設け、ダイバーシティ推進に取り組んでいます。女性活躍推進を重点課題とし、介護、国籍、年齢、障がい者など他の多様性対応についても実情を把握し、随時対象を広げています。

具体的には、在宅勤務制度の導入、フレックスタイム制度のコアタイム撤廃などの両立支援制度の拡充。短期の休業「子の看護」「介護」の有給化、帯同休業制度の新設など社員一人ひとりが輝き続けられる働き方を支える為の制度を拡充しています。また、ソフト面だけでなく、ハード面での環境整備も積極的に行い、2017年4月には、車の開発・生産拠点のある岡崎地区に「常設型託児所」を開設しました。今年、東京新本社内にも同様に開設する予定です。

● 事業内容

三菱自動車は「環境への貢献」「走る喜び」「確かな安心」を技術展開し、世界各国の需要動向に応じて新型車の開発・生産を行なう自動車メーカーです。

URL www.mitsubishi-motors.com



上：育児勤務者研修
下：託児所

● 取り組み内容

当社は、人(職員)が最大の財産であるとの認識のもと、ワークスタイルの変革に向け、『ワークにおける前進』と『ライフの更なる充実』を互いに好循環させる、という“ワークライフマネジメント”の実践を推奨しています。具体的には、自己成長に繋げる時間の捻出に向けた休暇取得を推奨する「ブラッシュアップデー運営」や、資格取得促進・健康増進意識の醸成を後押しする機会提供として「ニッセイアフタースクール」等の取組を実施しています。

加えて、育児・介護等の「ライフイベントとの両立支援」として、柔軟な勤務体系等の各種支援制度の整備やセミナー開催等を通じ、安心して仕事を続けキャリアアップを目指せる環境づくりをしています。

● 事業内容

個人および企業向け各種保険の引受け・保全サービス、有価証券投資・貸付・不動産投資など受託資産の運用、付随業務
 URL www.nissay.co.jp



上：ニッセイアフタースクール
 下：産育休復帰後職員向けワーママセミナー

● 取り組み内容

- ・いきいきと働いている社員の社内誌での紹介
- ・育児休職中の社員を対象とする、復職に向けたセミナーの実施
- ・特例子会社の事業領域拡大による、障がい者の自立支援
- ・社長メッセージ発信による「働き方改革」(限られた時間内で成果を出す、一人でできないことは仲間とシェアする、多様な働き方を認め尊重する等)の価値共有
- ・ICTを活用して、働く場所や時間の制約をできる限り取り払った「テレワーク」の本社内と一部支社での試行
- ・多様なチャンネルからの採用で、幅広い人材を確保
- ・間接部門と一部現業部門における、フレックスタイム制の導入
- ・従業員と連携して健康づくりに取り組むなど、優良な「健康経営」を実践している企業に顕彰される「ホワイト500」に認定等

● 事業内容

JR西日本グループは、2府16県におよぶ広大なエリアにおいて、1日あたり約500万人のお客様にご利用いただいている鉄道ネットワークや1,200を超える「駅」という拠点を活かし、様々なビジネスを展開している。
 URL www.westjr.co.jp/company/recruit



上：育児中社員向けセミナー
 下：ワーク・ライフ・バランスサポートBOOK等


● 取り組み内容

当社は、中国地方の金融機関として初めて厚生労働大臣から「プラチナくるみん」の認定を受けました。

当社の子育て中の女性社員の継続就業支援、積極的な男性の育児休業取得、パソコンログ管理による時間外労働の削減などにより、仕事と育児の両立支援を推進する働きやすい職場づくりに取り組んでいます。

また、社員が自宅でインターネット環境を利用して、金融機関に関する様々な内容のコンテンツを動画で勉強できる「WEBスキルアップシステム」を導入するなど、自己啓発にも取り組める環境を整えています。

● 事業内容

岡山県を営業基盤とした地域金融機関です。
 URL www.tomatobank.co.jp



上：短時間社員研修
 下：トマト銀行本店外観


● 取り組み内容

〈“働きやすさ”と“働きがい”をともに高めるために〉
 ①短時間勤務者の日数限定フルタイム勤務制度の導入。
 育児の短時間勤務は小学校3年生修了まで、勤務時間は7パターンから選択可。育休/短時間勤務あわせの制度の利用者は現在約110名。さらに多様な働き方を支援するため、本人希望により短時間勤務を基本にしながらフルタイム勤務日も設定可能に。両立支援とキャリア形成をともに実現します。

②次世代リーダー育成プログラムを岡山本店で実施中。
 男女ともに次世代リーダー育成を図るため、若手のうちから仕事の面白さを実感し成長に繋げていくプログラムをスタート。「売場づくり」や「イベント企画」などのテーマを設定し、役職者が講師となり、メンバーは研修で学んだテーマを売場で実践。人づくり改革を推進しています。

● 事業内容

おかげさまで創業190年。岡山・広島に百貨店を6店舗展開。『ありがとう』があふれる地域一番の“おもてなし感動デパート”を目指して、地域密着型の店舗づくりを追求。百貨店事業を中心に多様なグループ企業を展開。
 URL www.tenmaya.co.jp



上：天満屋岡山本店外観と「くるみん」マーク
 下：社員の働くイメージと「えるぼし」マーク



株式会社シーズ

● 取り組み内容

弊社は人財の採用・育成・評価という企業様の人事のサポートをする会社。私たちが地元中小企業にとって理想的な人事戦略を行うことは必然であり、企業ブランディングでもあるのです。
地元の中小企業はここまでの、働き方改革はしないだろう！?というレベルを実践し、私たちの体験を事例としてお客様に情報提供をしています。

働き方改革実践事例

システム導入(勤怠管理・営業管理・業務管理・人事評価)による効率化/パワーアップ休暇/ワークライフバランス休暇/プレミアムフライデー/時短正社員制度/時差出勤制度/年間休日123日/残業ゼロ運動/健康経営(禁煙手当支給など)/オカジョブカフェ勤務OK

● 事業内容

岡山・広島・福山を拠点に地元企業の業績アップをサポート。新卒・中途・アルバイトを中心とした採用支援。新人から幹部層まで対応する研修支援。人事制度の構築や組織分析・営業支援など組織の仕組み化支援。
URL www.seedsjp.com



上：時短会議！(立ち会議&システム化)
下：オカジョブカフェで勤務OK！



片山工業株式会社

● 取り組み内容

片山工業では、仕事・家庭・子育てを支援する取り組みを積極的に実施し、社員が働きやすい職場環境を整えています。

- ①事業所内保育所(おもいやり保育園)を2013年に開園
- ②柔軟な働き方ができるよう非製造部門でフレックスタイム制度を導入
- ③育児短時間勤務を小学校就学前までに拡大
- ④看護休暇・時間外勤務の制限(1ヶ月24時間以内)の適用範囲を小学校3年生修了までに拡大
- ⑤2018年1月に妊娠通院休暇制度を導入
- ⑥毎週水曜日・金曜日を「ノー残業デー」に設定
- ⑦失効する有給休暇を育児等で使用できるように積立有給休暇制度を導入
- ⑧男性の育児休暇奨励(取得実績3名)
- ⑨家族を対象とした職場見学会「Katayamaファミリーデー」を開催

● 事業内容

各種自動車用部品、福祉機器、ウォーキングバイシクル、金型・専用機等の製造、及び弁当の調理・宅配 ほか
URL katayamakogyo.jp



上：おもいやり保育園のハロウィンの様子
下：ファミリーデー



生活協同組合おかやまコープ

● 取り組み内容

育児休業は2歳まで、小学校2年生終了まで育児時短制度があり、介護休業は1年半まで、介護時短制度は、3年まで利用できます。
妊娠したことの申し出があった場合、利用できる制度・給付のご案内を個別にしています。また、家族の介護について相談があった場合も同様です。育児及び介護休業中の職員へ、毎月部内報や学習資料等を送り、感想や近況報告返信などのやりとりをしています。
『仕事と育児の両立』などをすすめる事業主として、岡山県内で最初に『くるみんマーク』の認定を受けました。また、2007年度『雇用均等・両立推進企業表彰ファミリー・フレンドリー企業部門』で、その年全国唯一の厚生労働大臣優良賞も受賞しました。

● 事業内容

岡山県内で34万世帯(組織率40%)の組合員さんへ宅配事業や店舗事業を通して食料品・日用品等を供給しています。福祉事業、共済事業、旅行等のサービス業も行う総合生活関連組織として活躍しています。
URL www.okayama.coop



上：ファミフレ受賞
下：新入協職員



株式会社岡山村田製作所

● 取り組み内容

①リフレッシュデーの設定 毎週水曜日をリフレッシュデー(ノー残業デー)としています。
②短時間勤務制度 満3歳に達するまでの子を養育する場合は1日120分、満3歳から小学校1年生年度末までの子を養育する場合は1日60分を限度に勤務時間を短縮することができます。
③育児休職者交流会 年1回、育児休職者に対して、社内の周知事項の共有や育児休職者同士の情報交換を目的に交流会を実施しています。
④夏休み子ども参観日 従業員の子どもに、働いている職場や仕事の様子を見学する機会として、夏休み期間の子ども参観日を実施しています。
仕事と子育ての両立支援の取り組みにより、女性だけではなく男性の育児休職者も増えています。

● 事業内容

当社は村田製作所グループにおいて、移動体通信機器市場をメインターゲットとする主要生産拠点です。最新の電子部品を供給することを通じて、もっと「つながる」社会の実現に貢献しています。
URL www.murata.com/ja-jp/group/okayamamura



上：夏休み子ども参観日
下：育児休職者交流会



オージー技研株式会社

● 取り組み内容

『わたしたちは変わる。』

オージー技研は、創業70周年を前に、大きな変革と挑戦に取り組んでいます。

- 多様な働き方への対応—新人事制度の導入
- 仕事と育児の両立支援—企業主導型保育事業による保育園「オージーキッズフィールド」の開園、子どもが10歳になるまで適用可能な短時間勤務制度の拡充
- ワークライフバランスの推進—残業時間削減のため数値目標を設定し、週1回のノー残業デーを実施
- 健康経営宣言—社屋内・敷地内の全面禁煙化
- 心身ともに健康で長く働き続けられる環境の整備

『すべての方の元気と、その先の笑顔のために』

生涯元気で活躍できる“ウェルネスな社会”を目指しわたしたちはこれからも挑戦し続けます。

● 事業内容

医療・福祉・健康機器の製品の開発、製造からメンテナンスまで、自社で一貫して行う。“技術第一主義”を理念に掲げ、保有する特許は200件超。国内で培ってきた実績をもとに、“世界No1”のリハビリメーカーを目指しています。

URL www.og-wellness.jp



上：様々な部門で女性の活躍が広がっています
下：企業内保育園「オージーキッズフィールド」

株式会社エクサ

● 取り組み内容

私たちは創立30周年を機に企業理念、ビジョンを一部見直し、新たな行動規範を「exa way」として策定しました。さらに抜本的なオフィス環境見直しのため、全社施策「働き方改革」を強く推し進める契機として実施したのが2018年1月本社移転です。働き方改革は、「オフィス改革」「ICT改革」「制度改革」「意識改革」の4つで構成されており、新オフィスではフリーアドレス制を導入し、席を自由にすることで部署にとらわれず社員同士が交流する空間を生み出している他、社内チャットツールの利用やWeb会議を活用することで、自宅・サテライトオフィスでの仕事も可能となり、場所にとられない自由な働き方を促進しています。

● 事業内容

独自のノウハウや業務知見を組み合わせたITの先進ソリューションを金融・保険・カード業、製造・流通業、公共・公益企業、海洋環境など多種多様な業界に提供し、高い信頼と評価を獲得しています。

URL www.exa-corp.co.jp



上：全部署がワンフロアに収まっている機能的なオフィス
下：壁面ホワイトボードを利用したMTG

CASE STUDY 14

働き方改革や

働きやすい職場環境づくりに

積極的に取り組んでいる企業紹介

「少子高齢化に伴う生産年齢人口の減少」「育児や介護との両立」「ニーズの多様化」など、働く環境が大きく変化している昨今、自分にとっての幸せな働き方を見つけるためには、まずどんな「働き方」があるのかを知ることがとても大切です。

この冊子では、2019年1月23日に開催の「学生と企業のためのダイバーシティシンポジウム」併設ブースに出席した働き方改革や働きやすい職場環境づくりに取り組む企業14社の事例をご紹介します。企業選びや社内改革のヒントになれば幸いです。

ABOUT US

ダイバーシティ推進実行委員会おかやま

当実行委員会は、大学生等のキャリア教育や情報発信、調査研究を通じて、家庭と企業双方の視点から男女共同参画の推進や働きやすい環境づくりなどダイバーシティの推進を行うことを目的として、岡山大学、一般社団法人岡山経済同友会、岡山県で構成された組織です。

ダイバーシティに関するシンポジウムや論文コンクールを実施しています。

構成団体 国立大学法人岡山大学
一般社団法人岡山経済同友会
岡山県
事務局 株式会社ロゴデザイン